書評

① G. Nagy, Comparative Studies in Greek and Indic Meter, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1974. (=N_1)
② id., On the Origins of the Greek Hexameter: Synchronic and Diachronic Perspectives, Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science Ⅳ, Amsterdam, 1980. (=N_2)

以上のN_1，N_2の内容を総合しながら，以下Ⅰ，Ⅱ，Ⅲで述べていく（一部私見が付け加っているところもある）．Ⅰでは，hexameterの起源について述べられており，主としてN_1の要約である．Ⅱでは，ギリシャ語κλέος ἄφθιτονと Rig-Veda śrávа(s) ákṣitamは語形上だけでなく，韻律上も対応があることが示されており，N_1の要約である．Ⅲは，Ⅰのhexameterの起源についての補足で，N_2の要約である．

Ⅰ

この本（N_1）の基本的な主題は，ギリシャのhexameter（以後hex）は印欧語の遺産である叙情詩の韻律に起源をもっていたということである．そこでまず，ギリシャの叙情詩の韻律に関する事実を検討することから始めよう．共時的な観点から，Glyconic（以後gl）⏓ ⏓ —⏑⏑ —⏑⏓ はchoriambusによって拡張されてgl^cになり得る：⏓ ⏓ —⏑⏑— —⏑⏑ —⏑⏓．さらに2，3個のchoriambusによって拡張され，gl^{2c}，gl^{3c}となる．同様にglは1 or 2個のdactylusによって拡張されて，
gl^d ⏓ ⏓ —⏑⏑ —⏑⏑ —⏑⏓，gl^{2d}になり得る．

さてglはcatalecticな変型，Pherecratic（以後pher）をもっている．pherも又 dactylusによって拡張されうる：

pher ⏓ ⏓ —⏑⏑ — ⏓ → pher^{d} ⏓ ⏓ $\underbrace{\text{—⏑⏑}}$ —⏑⏑ — ⏓ ．さらにpher^{2d} ，pher^{3d} が存在する．glもpherも共にacephalicな変型をもっている：⏓ —⏑⏑ —⏑⏓ $=_{\wedge}$gl，⏓ —⏑⏑ — ⏓ $=_{\wedge}$pher.

以上が共時的な観点からである．一方，通時的な観点から，上に調べたしくみは，インドの韻律にもcognate mechanismが attest されるという点で，印欧語の遺産であると考えることができる．

dactylic hex の起源の問題に移ろう．hexの原型はpher^{3d}であると提案する：

⏓ ⏓ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏓.
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

このことは，原初的なhexは印欧語から継承された韻律の特徴isosyllabismの原則に基づいていたことになる．pher^{3d} からdactylic hexを得るために次のような発展があったと考える：

（1）—⏑⏑ の— —による任意の置きかえ．（2）Aeolic base ⏓ ⏓ の— — による置きかえ．さらにこの— — は —⏑⏑ と任意に入れ替る．

（1）の —⏑⏑ →— — はおそらくギリシャ語において，ある単語の母音間の*sと*y が消失した後，母音（V）のcontractionが起ったためであろう．
$\breve{V}_1$ s $\breve{V}_2$ or $\breve{V}_1$ y $\breve{V}_2$ →$\bar{V}_3$

この場合，この単語を含んでいたformulaが２つの短＝１つの長という等置の先例を作ることになる．単語の配置（phraseology）の中で形式的変化があれば，それが韻律の中に対応する変化を引き起こすことがある訳である．

（2）なぜ ⏓$_1$ ⏓$_2$ は次第に —$_1$ —$_2$ に置きかえられたかという困難な問題が残っている．これに答えるのにAllenのictusの理論を検討するのが有益である．

Allenによれば，ギリシャの詩行におけるictusはギリシャ語における

stressの直接の反映である．ギリシャ語のstress-systemは本来，ギリシャ語のintonation-systemと独立していた．stressの規則は２つである：(a)単語のprimary stressは最後の長音節にあった．(b)secondary stressは先行する長音節に，もしそれがprimary stressから少なくとも１mora 離れているならば，落ちた．

この定式を大数の dactylic hexとiambictrimeterにあてはめてみた時，ギリシャの詩行におけるictusはギリシャ語におけるstressと一致するという理論に彼は到達した．hexはたとえば次のようなictusのパターンを示す：

—̣ ⏑⏑ —̣ ⏑⏑ —̣ ‖ ⏑⏑ —̣ ⏑⏑ —̣ ⏑⏑ —̣ ⏓ (caesura 2.5)．

しかしbucolic diaeresisをもった韻律の場合，

—̣ ⏑⏑ —̣ ⏑⏑ —̣ ⏑⏑ —̣ ⏑⏑ ‖ —̣ ⏑⏑ —̣ ⏓ ，4th footがもしspondeusなら — —̣ ‖ —̣ ⏑⏑ —̣ ⏓，ictusがfootの後の部分にきてictus-rhythmをこわす．したがって，長音節のfinalをもった多音節のホメロス（以後Hom）の単語のうち，約７％しか 4th footで終らない（dactylusに終る単語の場合50％）． このことは 4th footに限らず 5th foot，2nd footでも同様に，finalがspondeusである単語がこれらの個所で終ることはまれである．一般にspondeusはすべてのhexのfootで起りうるが，spondeusの単語の終りは普通，footの終りと一致することはできない．一つの例外は1st footである．この個所ではspondeusは 4th footよりもわずかに多いだけであるが，spondeus の単語の終りは３倍も多く，1/10の行が 1st foot でこのタイプの caesura を持っている．この事実は，hexの 1st foot は起源的に dactylus でなく spondeusであることを示唆している．さらにこの 1st foot の spondeus は Aeolic base ⏓ ⏓ にさかのぼることができる．

pher[sd]の仮説をhexの主なcaesura（以後caes）の問題に適用してみよう：

⏓ ⏓ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏓
1 2 3↑4 5 6↑7↑8 9↑10 11↑12 13 14 15 16
1.5 2.5 2.75 3.5 4

$\overline{3}$ ‖trithemimeral caes (1.5)，$\overline{6}$ ‖penthemimeral caes (2.5)，

$\breve{7}$ ‖ trochaic caes (2.75), $\bar{9}$ ‖ hephthemimeral caes (3.5), $\breve{11}$ ‖ bucolic diaeresis(4).

このうち最も重要なpenthemimeral(2.5)とtrochaic(2.75)caesだけで Homの hexの約 99%がこの caesを持っている．次に最も普通の caesは bucolic diaeresis (4)であり，Homのhexの約60%で起っている．

ここで，これらのcaesはformula(pl.)の接合点を示しているというParryの理論を適用しよう．彼が示したことは，Homのhexにおいて韻律の最も普通の不規則のうちの２つは規則的に５つの主なcaesのところで起るということである： a)1.5, 2.5, 3.5のcaesの前で短（—$\breve{\text{V}}$C+V—）〔Cは子音〕

— ⏑⏑ ⏑ ‖, — ⏑⏑ — ⏑⏑ ⏑ ‖, — ⏑⏑ — ⏑⏑ — ⏑⏑ ⏑ ‖

↑ 1.5 ↑ 2.5 ↑ 3.5

b)2.75のcaes, ４のdiaeresisの前で hiatusを作って短（—$\breve{\text{V}}$+V—）

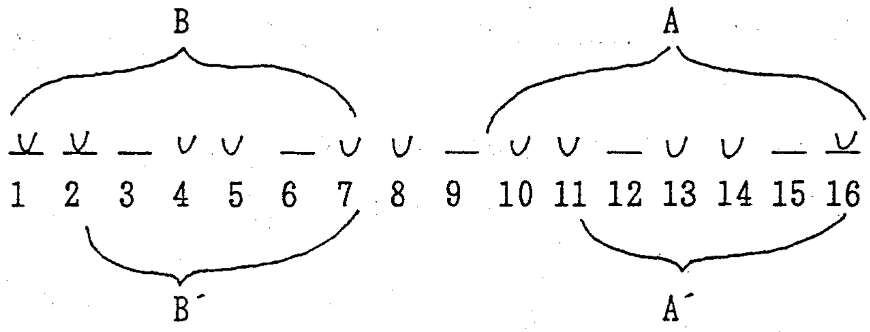
— ⏑⏑ — ⏑⏑ — ⏑ ‖, — ⏑⏑ — ⏑⏑ — ⏑⏑ — ⏑ ⏑ ‖

↑ 2.75 ↑ 4

このような韻律の不規則はformulaの並列（juxtaposition）から起ることに彼は気づいた．このformulaの並列のプロセスはギリシャの叙事詩の作詩法の基本的特徴である．

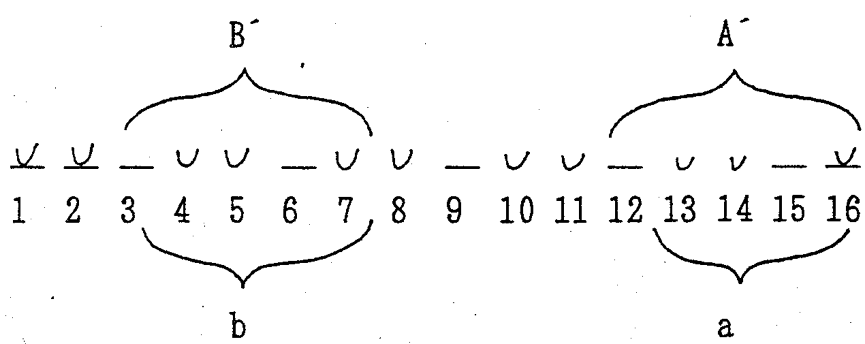
Parryの理論のエッセンスは次のようである：『formulaの規則性は韻律の規則性に優先する．』したがって，時として韻律の規則性が犠牲になってformulaの規則性が得られることもあるのであり，上記のcaesの前での韻律の不規則はそのことを例証しているわけである．さらに，これらの韻律の不規則な大部分formulaの最後の位置で起っていることが知られるのであり，したがってこのようなformula（pl.）は pher[3d] より短い詩行（pl.）より発生したと提案しよう．つまりepic hexの原型であるpher[3d] は，より短い詩行の formula（pl.）を収容していたのであり，attestされる caesと diaeresisのsystemへとついに導いたのは，これらのformulaなのである．

仮説を押し進めて行くと，このより短い詩行の最も顕著なタイプは pher ⏓ ⏓ — ⏑ ⏑ — ⏓ であるとまず仮定しよう．



pherのformula A, Bは，上のようにpher^{3d} にはめこまれていることになる．しかし，Aeolic baseで長音節を持っているものはAから除外されなければならなかっただろう．このような Aeolic baseでの制限は partial pher formula — ⏑⏑ — ⏓ の侵入を助けたであろう．これをA´, B´で表す．すなわちpher formulaが Aeolic baseの後に caesをもった ⏓ ⏓ ‖ — ⏑ ⏑ — ⏓ のような形の formuilaは segment ⏓ ⏓ を省略すれば，A´にもB´にもあてはまることができる．以上のようなformulaの配置は，slot 7の後の caes（trochaic），slot 9の後（caes 3.5），slot 11の後（bucolic diaeresis）の caesの一般化に導いたであろう．segment A´, B´にはまるformula — ⏑ ⏑ — ⏓ は叙情詩で親しまれており，Adonicと呼ばれている．

— ⏑ ⏑ — ⏓ という形のformulaの外に，もう一つの partial pher formulaがある，すなわち ⏑⏑ — ⏓．formula — ⏑⏑ — ⏑のA´/B´交替に並行して，formula ⏑ ⏑ — ⏑ の a/b 交替が見いだされる：



epic hexにおける最後に残った重要なcaes，すなわちslot6の後，caes2.5の問題が残っている．これはpher^{d}の形のformula，正確に言うと
⏑⏑ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏓ =C の収容から起ったと提案する：

C

⏓ ⏓ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏑ ⏑ — ⏓

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

A

Homのhexの終わりに位置しているA対Cのformulaの次のセットがある：
A ⏑⏑‖— ⏑ ⏑ — ⏓ ：C ⏑⏑ ‖— ⏑⏑ ‖ — ⏑⏑ ⏓．
たとえば，
…δέπας ἀμφικύπελλον#＝A.
…δέπας οἴσεται ἀμφικύπελλον#＝C.
このような叙事詩における dactylus の formulaの侵入は，叙情詩における dactylusの韻律上の侵入，すなわち内的拡張と呼ばれるプロセスに対応する．しかし同じくhexの終りにあるA対Cのformulaの別のセットがある：
A ⏑⏑—⏑⏑ ‖ — ⏓ ：C ⏑⏑ — ⏑⏑ ‖— ⏑⏑ ‖ — ⏓．
たとえば，
…μεγαλήτορι θυμῷ #＝A.
…μεγαλήτορι ἥνδανε θυμῷ #＝C.
このタイプの叙事詩におけるdactylusのformulaのそう入も又，叙情詩におけるdactylusによる韻律上の拡張（この場合pherのAeolic baseの後にではなく，行末の — ⏓ の前にではあるが）に対応すると考えられる．hexにおけるcaesのまれなパターン：
… ⏑⏑ — ⏑⏑ — ⏑⏑ — ‖ ⏓，…⏑⏑ — ⏑ ‖ ⏑ — ⏑⏑ — ⏓
と普通のパターン：
… ⏑⏑ — ⏑⏑ —⏑⏑ ‖ — ⏓ ，…⏑⏑ — ⏑⏑ ‖ — ⏑⏑ — ⏓

を比較してみれば，上に述べたA対C formulaのvariantの反映がここに見られると思う.

epic hexにおける２つの基本的なcaes(2.5，2.75)の問題にもどろう.

x　　　　　　　　　Y

⊻ ⊻ _ ⏑ ⏑ _ ⏑ ⏑ _ ⏑ ⏑ _ ⏑ ⏑ _ ⊻

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

X　　　　　　　　　y

formula Yとyは機能的 variantである．たとえば，

Y… ἐμίγη φιλότητι καὶ εὐνῇ #

y… μίγη φιλότητι καὶ εὐνῇ #

Y / y variationは特にepitheton＋名前の結合がgen. sg. の形で現れる場合が顕著である：

Y… ἑκατηβόλου Ἀπόλλωνος#

y… ἑκηβόλου Ἀπόλλωνος#

しかし，epitheton＋名前の結合がnom. sg. の時は，多数のyの形の例が存在するにもかかわらず，同じ人に適用されるYの形のvariantがない．たとえば，y… πολύτλας δῖος Ὀδυσσεύς#

Parryはnom.-formulaとgen.-formulaの間には，先行するformulaとの関連で，根本的な差違があることに気づいた．つまり，前者は通常先行する動詞の主語であり，後者は先行する名詞にかかる語であることが多い．このnom.が主語である動詞の形は，主に語りからなる叙事詩の性格上，3rd pers.の過去であり，-e 又は -to に終わることが多い． もし動詞が nom. の epitheton＋名前の結合の直前に来るなら，formulaは次のようでなければならないはずである：

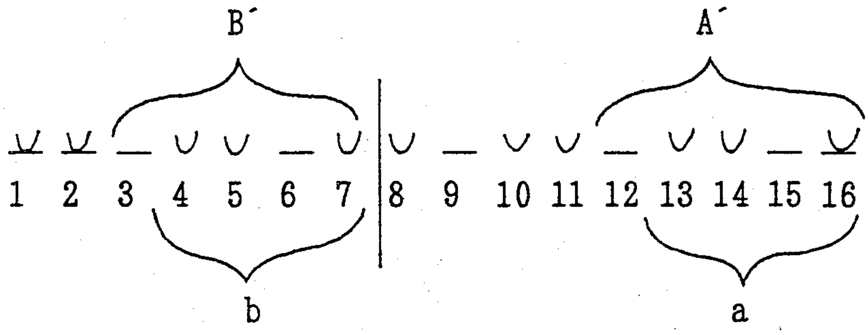
動詞

$$\overbrace{\cdots\ \cup}\ \Big\|\ \underbrace{\cup\ -\ \cup\cup\ -\ \cup\cup\ -\ \underline{\cup}}_{\mathrm{y}}$$

たとえば X＝τοῖσι δὲ καὶ μετέειπε ‖ 2.75

Parryの分析を越えてさらにすすんでみよう．たしかに理論的には $\underline{\cup}\ \underline{\cup}\ -\ \cup\cup\ -\ \|$ の終わりに位置することができる動詞，すなわち -ηに終わる語（ἀπέβη，μίγηなど）と3rd sg.の -ενに終わる語（次に子音で始まる語の来る場合）が存在するのである．ところが奇妙なことに-η ‖ 2.5 というパターンは，韻律上は問題ないにもかかわらず，完全に欠けており，-εν ‖ 2.5 C-というパターンはきわめてまれである．このようになぜ Xは規則的に 3rd sg.過去の動詞に終り得るのに，xはそうでないのかという疑問につきあたる．

これはおそらくformulaの遺産の問題であろう．すなわちYの形の主語がyにとって替ったとき，formula Xに替るべきformula xが継承されていないのである．X formulaの動詞は行末の位置にも起り得るものである．
たとえば
‖ 4 Καὶ μετέειπεν#.
すでに述べたように，このような位置の交替はpartial pher formulaの特徴である：



したがって Xは partial pher formula B´, bの宿る所であって，このことがformulaのふるまいの点でsegment Xをxと異ならせているのである．さらにXはpherであるが，x= ⏓ ⏓ — ⏑ ⏑ — の方は Aeolic meterとして存在しない（**catalectic pher）．以上のことが，Xとxは起源的にformulaのvariantでなかったし，さらに韻律上の variantでもないことを示している．

これに反して，yとYは先に述べたように機能的 variantであり，又韻律上の variantでもある．すなわち，Y=pher^{d} と y=acephalic pher^{d} は叙情詩の韻律において variantである。

II

ギリシャ語がサンスクリット語とcognateであるのとちょうど同じように，ギリシャの叙情詩の韻律も又，Vedaの韻律とcognateである．これらの印欧語の個有の韻律（ギリシャとインド）が関係を持っていることが真実であるなら，これらの韻律に組みこまれている伝承された句の対応を見つけることも可能であろう．本書（N_1）で注目したいのは，1853年にKuhnがすでに気づいた句の対応，Sappho / Hom κλέος ἄφθιτονとRig-Veda（以後RV）śráva(s) ákṣitam である．このギリシャとインドの表現は共に，伝統的に「不滅の名声」と解釈されており，同一の原型*k̑lewos n̥-g^{w}hδítom（cf.Rix, Historische Grammatik des Griechischen p.31）に再建されう

る。次に示したいことは，これらのcognateな句の韻律上の前後関係も又cognateであるということである．ギリシヤのκλέος ἄφθιτονはHom（Ilias IX 413）とgl^{2d}の詩行からなるSapphoの詩44.4の行末に見いだされる（すなわち…κλέος ἄφθιτον ∪∪ — ∪ ⏓）．

しかしまず，κλέος ἄφθιτονのcognateであるśráva(s) áksitam の韻律の前後関係を調べてみよう．これは，8音節（Gāyatrī）の連続する2行に含まれている：

1 2 3 4 5 6 7 8
— — ∪ — ∪ — ∪ ⏓
śrávas

1 2 3 4 5 6 7 8
— — — — ∪ — ∪ ⏓
ákṣitam 〔RV I 9,7 bc〕

Vedaの8音節は，固定していないリズムのopening 4音節と，固定したリズムのclosing 4音節に分けられ得る．closingにおける句はopeningにおける句よりもより伝統的である可能性が高い．というのは，リズムのinflexibilityが，closingに合った新しい句を考え出すことを困難にするからである．したがって，śrávasとákṣitamのclosingにおけるこれらの位置はarchaicであると考えられる．

ここでのśrávasはákṣitam（closingの終りの3音節をしめている）から離されている理由は，もしśrávasがákṣitamに直接先行した（κλέος ἄφθιτονと同じように）なら，その結果パターンは

4 5 6 7 8
∪ ∪ — ∪ ⏓
*śráva(s) ákṣitam

となって，RVではすたれつつある連続する2つの短∪∪を含むことになったであろう．この∪∪をさける韻律上の傾向に従って，śráva(s) ákṣitamのáksiti śrávas による句の配置がえがある：

4 5 6 7 8

— ∪ — ∪ ⊻ (RV 3回)

ákṣiti śrávas

ákṣitaはákṣitiよりもarchaicであることは形態論の立場から知ることができる．すなわち印欧語の観点から，suffix*-to で作られる形容詞がsuffix*-ti に終る抽象名詞を生み出した．したがって，verbal adjective kṣitáを基礎として*kṣitíが期待される（Atharva-Veda kṣíti）．これよりRVの形容詞 á-kṣitiがBahuvrīhi「kṣitiを持たない」として作り出されるだろう：á-kṣiti（BV.）＜*kṣití＜kṣitá．RVにおいては，ti-抽象名詞の否定詞a-によるBahuvrīhi化はきわめてまれで，しかもこれによってできた形容詞が中性名詞を修飾する用法は異常である．したがってákṣitiと中性śrávasの結合（ákṣitiはこの語とのみ結合）はad hocで2次的なものと思われる．又，ἄφθιτον はákṣitiとでなくákṣitamと形態上一致しているという比較の根拠も，ákṣitaがákṣitiよりもarchaicであることを示している．

RVの8音節のclosingにおいてśrávas（nom.acc.sg.）は音節5-6（子音の前）と7-8のみであり，4-5はない：

1 2 3 4 5 6 7 8　　　5 6 7 8

⊻ ⊻ ⊻ — ∪ — ∪ ⊻,　…∪ — ∪ ⊻.

śrávas ‖ C-　　　　śrávas

これに反して，RV の同じ位置において śrávas の単数斜格は音節 4-5-6に attestされる（RV4例）：

1 2 3 4 5 6 7 8

⊻ ⊻ — ∪ ∪ — ∪ —

śrávas-as　mahás

-e　mahé

-i　śrávas

これらの3音節の形は4-5で∪∪を取り除こうとする傾向に抵抗しているという点で，その位置は2音節śrávasの位置（4-5から移されたと考えられる）

よりもarchaicである．つまり，śrávasas等の形はclosingにおけるiambusを破らないためには4-5-6の位置が最も理想的であって，このために，śrávasの形と異って，この位置に残り得たと言えよう．したがってśrávasの古い位置は4-5であり，ákṣiti śrávasは*śráva(s) ákṣitam ∪ ∪ — ∪ ⊻ のinnovationである．

4 5 6 7 8

κλέος ἄφθιτον はglの末尾にぴったりはまることに注目しよう．もしギリシャのglはインドのGāyatrīの8音節と関係しているならば，śráva(s) ákṣitamがGāyatrīの末尾に位置していた可能性を考慮して，κλέος ἄφθιτονはglの末尾に位置していたと期待してもよいだろう：

* ⊻ ⊻ — ∪ ∪ — ∪ ⊻

κλέος ἄφθιτον

すなわち，κλέος ἄφθιτονとśráva(s) ákṣitamは形においてだけでなく，韻律のcontextにおいてもcognateであることが予想される．残念ながらκλέος ἄφθιτονがこの位置に見いだされる例は欠けているが，それでも先に述べたように，Sappho 44.4 の内的に拡張された gl (gl^{2d}) の末尾にattestされる．

これに対して Homの例（Hom 1 回）は本来の位置を示していないと思われる：

… ‖ ἀτὰρ κλέος ἄφθιτον ἔσται #

2.75

‖ ∪ — ∪ ∪ — ∪ ∪ — ⊻ #

ἀτὰρ以下のformulaはacephalic pher^{d}となっており，epitheton ἄφθιτονはpartial pher segment ∪∪ — ⊻ の∪∪と — ⊻ の間にそう入されたdactylusのような形をしている．一方，…κλέος ἐστίν# (Od. IX 264) 等におけるformula ∪∪ — ⊻ はpartial pherであって，行末だけでなくtrochaic caes (2.75)の前にも起りうる：

\# τοῦ δ' ἤτοι κλέος ἔσται ‖ (Ilias VII 451)

2.75

このように，タイプκλέος ἄφθιτον ἔσταιはタイプ

κλέος ἔσται/ ἐστίν etc.に基づいて，dactylusによる拡張によって作られているから，originalな位置を表わしていないと思われる．

Ⅲ

dactylic hexの再建のさらなる論拠は，Stesichorus（以後St）の最近出版された断片から得られる．その韻律の一般的パターンは
⏓ — ⏑⏑ — ⏑⏑ — (⏓).
StのIliou persisでは，initial ⏓ は機能的 variant⏑⏑を持っている：
⏓ — ⏑⏑ — ⏑⏑ — (⏓).
⏑⏑
⏓と ⏑⏑のvariationは，いまだ共時的な現象としてattestされるものであり，hexにおいて ⏓ ⏓ の替りに — ⏑⏑ (1st foot) を代置することとparallelである(acephalic equivalent) ．

StのGeryoneisでは，—と交替する⏑⏑を発見するが，もはや⏑とは交替しない：
— — ⏑⏑ — ⏑⏑ — (⏓).
⏑⏑
このパターンは，Iliou persisにおけるものよりもよりarchaicでないと考えられ，hexの1st footにおける — ⏑⏑ の — — との交替とparallelである．

Stの韻律の主な構成要素：⏓ — ⏑⏑ — ⏑⏑ — は伝統的にprosodiakon（以後 pros）として知られており，dimeterのようにふるまう。

伝統的にiambelegosとして知られているパターン：
⏓ — ⏑ — ⏓ ‖ — ⏑⏑ — ⏑⏑ — = ia ⏓ ‖ ∧prosをiambic trimeter：
⏓ — ⏑ — ⏓ ‖ — ⏑ — ⏓ — ⏑ — = ia ⏓ ‖ ∧ia iá と比較すれば，共にparallelなopeningとparallelなdovetailingのパターンを示している．この parallelismに基づいて，ちょうどギリシャの詩でattestされる次の８音節の韻律と同じように，prosは印欧語のdimeterの側枝である：

choriambic dimeter ⏓ ⏓ ⏓ ⏓ – ⏑ ⏑ ⏓
"irregular glyconic" ⏓ ⏓ ⏓ ⏓ ⏑ – ⏑ ⏓
glyconic ⏓ ⏓ – ⏑ ⏑ – ⏑ ⏓
iambic dimeter ⏓ – ⏑ – ⏓ – ⏑ ⏓
prosodiakon ⏓ – ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑ ⏓

iambelegosのほかに，enkomiologikonとして知られている反対のパターンが見いだされる：

– ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑ – ‖ ⏓ – ⏑ – ⏓ = $_{\wedge}$pros ‖ ia ⏓ .

acephalyのないタイプもattestされる：

⏓ – ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑ – ‖ ⏓ – ⏑ – ⏓ = pros ‖ ia ⏓ .

さらに，$_{\wedge}$prosがia ⏓ へとdovetailしたenkomiologikonもattestされる：

– ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑ – ⏓ ‖ – ⏑ – ⏓ = $_{\wedge}$pros ⏓ ‖ $_{\wedge}$ia ⏓ .

同様に，Archilochusにおける次のパターンが見いだされる：

⏓ – ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑ – ⏓ ‖ – ⏑ – ⏑ – ⏓ = pros ⏓ $_{\wedge}$ia$_{\wedge}$ia.

pros ⏓ はたまたま形式上 pher^{d}と同じであり，一方 $_{\wedge}$pher^{d}は hex の cadenceと同じである：⏓ – ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑ – ⏓ pros ⏓ = $_{\wedge}$pher^{d}.

先に述べたGeryoneisに現れる韻律：

⏔ – ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑ – ⏓ は *pros ⏓ = $\overset{*}{\wedge}$ pher^{d} となる（asteriskはinitialの⏓が ⏔ に置き替えられていることを示す）．Iliou persisの韻律：

⏓/⏑⏑ – ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑ – ⏓ は pros ⏓ = $_{\wedge}$pher^{d}となる．

N_1で述べたpher^{3d}とhexにおけるformula x+Y or X+yについて，Stの韻律による新しい論拠を用いて，問題を単純にすることができる．yは $_{\wedge}$pher^{d}＝pros ⏓（initial ⏑）であり，Yは $\overset{*}{\wedge}$ pher^{d}＝*pros⏓である． 又一方，x＝$_{\wedge}$pros，X＝$_{\wedge}$pros ⏑であり，Xは又pherでもある．

xはprosの観点のみから示され，pherの観点では示されない唯一の部分である．この不均衡が，xのある特定の句がhexにおいて欠けていること（Xと反対に）の説明になるかもしれない．

箕田正開